

福島県における経営階層より見た 農家経済構造の分析

中 鉢 儀右工門・青 田 剛

(福島県農試)

1. はじめに

この調査は県内農家の経済構造を経営階層別に分析し個々の農家が改善せねばならぬ事項を明らかにし、農業経営改善の資料を得る目的で昭和24年度より継続調査を実施した。

われわれが分析を試みたのは昭和28年と昭和31年度における農家経済を経営階層別にその様相について若干の考察を試みたものである。

2. 調査対象農家の経営的諸条件

調査農家は主として昭和24年度以来の調査継続のため昭和28, 31年次とでは経営規模その他の諸条件に変化を認めず次表の通りである。

経営条件(1戸当り)

	調査戸数	耕地面積			家族数	農事従事者数	家畜頭数
		田	畑	計			
大経営	11	14.7	9.4	24.1	8.3	3.7	1.0
中経営	43	8.5	6.5	15.0	7.6	3.2	0.9
小経営	40	4.9	3.2	8.1	7.0	3.0	0.7

3. 農家経済の分析

1. 農家収入

農家収入は28年についてみるに経営階層別では当然大経営が多く、次いで中・小経営の序列となり現金収入は経営規模の上昇に伴い総現金収入に対する農業収入は大となっている。大経営の農業現金収入における稲作収入が最大のウェイトを示し次いで畑作収入となっている。

中経営は前者と概ね同様の傾向であるが、商品作物収入が目立ち経営の集約化を押し進めている。小経営は更に強く稲作収入が低下し、これに替るに果樹が最大の比重を占めている。しかしこの階層における農業収入の不足を農外収入に依存せざるを得ない現状にある。更に31年度の農家収入は豊作のため稲作収入の著増をみ、農家現金収入における稲作収入のウェイトが各経営層とも上

廻っている。大経営の農業収入に対し稲作収入は28年より圧倒的割合を示し、中・小経営でもその割合は大となっている。

2. 農家支払

農業経営費は経営階層の上昇に比例して多い。この支払費目のうち肥料費は各費目を通して最大の割合を示し、次いで雇傭労賃・飼料その他の序列となる。肥料費等が農業支出中に多いことは農業における資本主義経済の滲透—交換経済がより強化されていることを意味する。

3. 家計費

	農 業 収 入 (現金)					農外収入	現 金 計 収 入 計	現 仕 物 向 け	合 計
	林産物	加工	煙草	その他	小計				
大経営	8,302 (1.6)	3,854 (0.7)	32,091 (6.1)	11,077 (2.2)	521,960 70.6 (100.0)	43,137 5.8	565,097 71.8	14,343 23.6	739,440 40.4
中経営	10,573 (3.5)	9,414 (3.1)	16,715 (5.5)	9,686 (3.2)	303,935 61.1 (100.0)	54,842 11.0	358,777 72.1	138,307 27.9	97,084 100.0
小経営	8,750 (3.8)	2,525 (1.1)	30,238 (13.2)	10,993 (4.8)	229,237 54.5 (100.0)	81,162 19.3	310,339 73.8	119,011 26.2	420,350 100.0

りんご販売上の問題点

一特に小売段階について一

佐 藤 多 吉

(青森県農業総研)

1. 問題の提起

りんごが生産されてから消費されるまでには幾つかの流通段階を経過する。この場合、特に生産者手取り額の維持と、りんご消費の大衆化を促進する方策として系統販売の有利性が強調され、それに関連して青森県りんご出荷体制の後進性が批判される。しかし、現段階においては大衆化を阻害する要因として、産地の出荷体制とともに、市場・小売段階の非合理性をも合せ強調されなければならない。

特にここでは小売商実態調査の結果を中心に、小売段

階の問題点について述べることにする。

なお、この調査は東京大学青果物流通研究会との共同でされたものである。

2. りんごの市場及び小売価格

(みかんと対比)

最近の価格形成の傾向として、青果物の供給弾力性は極めて小さく、価格は需要の条件に左右され、買手市場となって一種の購買独占の形が成立している。しかし、この形も青果物の種類によって同じでなく、りんごとみかんについても表掲のように異っている。

	り ん ご	
--	-------	--